

# 「イクジイ」川辺の学習を通して 子どもとの関わり

育児に協力したいけれど、どう関わったらいいか分からないという男性たちが多く中、自分自身も楽しみながら、子どもたちや地域に貢献する働きをしている頼もしい「イクジイ」たちがいます。今回は、そのような「イクジイ」の一人、「帯広川伏古地区子どもの水辺協議会」の会長 関川三男さんにお話を伺いました。



『地域でやれば、  
もっと楽しいー!』

川の楽しさや地域の素晴らしい自然を子どもたちに伝えようと、三年前から「帯広川伏古地区子どもの水辺協議会」を設立し、幅広い年代層を巻き込んで活動をしている関川三男さん。「子どもとの付き合い方」はマニユアル（解説書）があるわけではない。川を愛でながら散歩することや釣りをするのは楽しいもの。それを個々ではなく、地域でやればもっと楽しい」と語る関川さん。

お話を伺うと、まさに現在の日本社会が期待の目を向けている「イクジイ」としての働きでした。



〈サケ稚魚放流〉

『川の体験を  
通して学ぶ』

関川さんたちメンバーが活動している場所は、帯広市西二十一一条南2丁目の帯広川。そこで、校区の小学校と幼稚園の子どもたち約200人が毎年、同協議会の指導の下で川辺の体験学習をしています。「深さ20センチの水があれば死ぬ危険がある。自然は怖いもの。楽しいけれど危ない。だからルールを守るということを第一に教える」。それとともに、「自然と向き合うと食育につながる」ということで、釣った魚を食べるとき、食べるということの意味や、他の命の大切さについて教えます。

そうすると、他の生き物の痛みが分かるようになり、それはいじめ防止にもつながります。さらに川の水を汚すと自然を破壊して、自身の食べ物もなくなる、という大自然の循環にも及び、子どもたちは広範な学習を、頭だけでなく、体験を通して肌で感じ、学ぶことになりました。

そして、魚釣りをしたときなどは河原のゴミ拾いをしますが、ゴミ拾いをした人はゴミを捨てなくなります。「うちの町内会はきれい」と関川さんは胸を張ります。その上、日頃から子どもたちは地域の大人たちと交流があるので町内が明るく、安全で安心につながると、この活動の波及効果についても熱く語ります。

『「イクジイ」は  
得意とする分野で!』

関川さんは釣りが大好きで、「歩いて1分でニジマスが釣れるところに住んでいるが、これはぜいたくで素晴らしいこと」と、夏場は毎朝、釣りに出掛け、また、水面の写真を撮影して、水の透明度を調べたりしています。このような自分が楽しんでやっていることの延長線上に子どもたちや地域の人々との関わりがあり、それが地域に貢献する活動となっています。

「イクジイ」としての活動に限定はなく、さまざまなものがあり、関川さんたちグループのようにそれぞれが関係団体などを巻き込みながら楽しむことが秘訣と言えそうです。



〈川流れの様子〉